

カンキツ「不知火」の施肥方法

農業研究センター 果樹研究所 病虫化学部
担当者：岡島量男・相川博志

研究のねらい

「不知火」は、ポスト甘夏として近年急速に栽培面積が増加したが、樹勢が弱く、生産が不安定であることから、産地では樹勢強化のため施肥量を増やし、逆に樹勢を低下させているところもある。このため、樹勢強化と生産安定を図るための施肥法を確立することが急務であり、肥料の種類、施肥量および施肥時期について検討した。

研究の成果

- 1 肥料は一般に使用されている有機配合肥料や被覆肥料入り有機配合肥料(有機質割合 55~75%)が化成肥料や動物有機肥料に比べ、樹の生育が良好で、収量が多かった(図1)。
- 2 有機配合肥料は果実品質においても糖度が高く、クエン酸含量が低く、良好であった(図1)。
- 3 施肥量では標準施肥が1.5倍施肥に比べて樹の生育が良く、収量も多かった。また、標準施肥は、果実品質も糖度が高く、クエン酸含量が低く良好であった(図2)。
- 4 施肥時期では、標準の5回施肥が6月・9月重点の4回施肥に比べて、樹の生育、収量での差はなかったが、糖度が高く、クエン酸含量が低く、果実品質は良好であった(図2)。
- 5 根量調査の結果は、標準施肥で多く、1.5倍施肥では濃度障害で根が腐敗し、細根量が非常に少なかった(図3)。

普及上の留意点

- 1 不知火は、樹勢が弱いいため肥料の吸収力が弱く、施肥量を多くすると細根が肥料の濃度障害を受け腐敗することから、1回当たりの施肥量を少なくする。
- 2 年間施肥量も県の基準程度とし、施肥回数を多くすることによって肥効を高める。

(施肥量は窒素成分 21kg / 10a である。施肥回数は 5 回、ただし被覆、6 月、9 月の各区は 4 回)

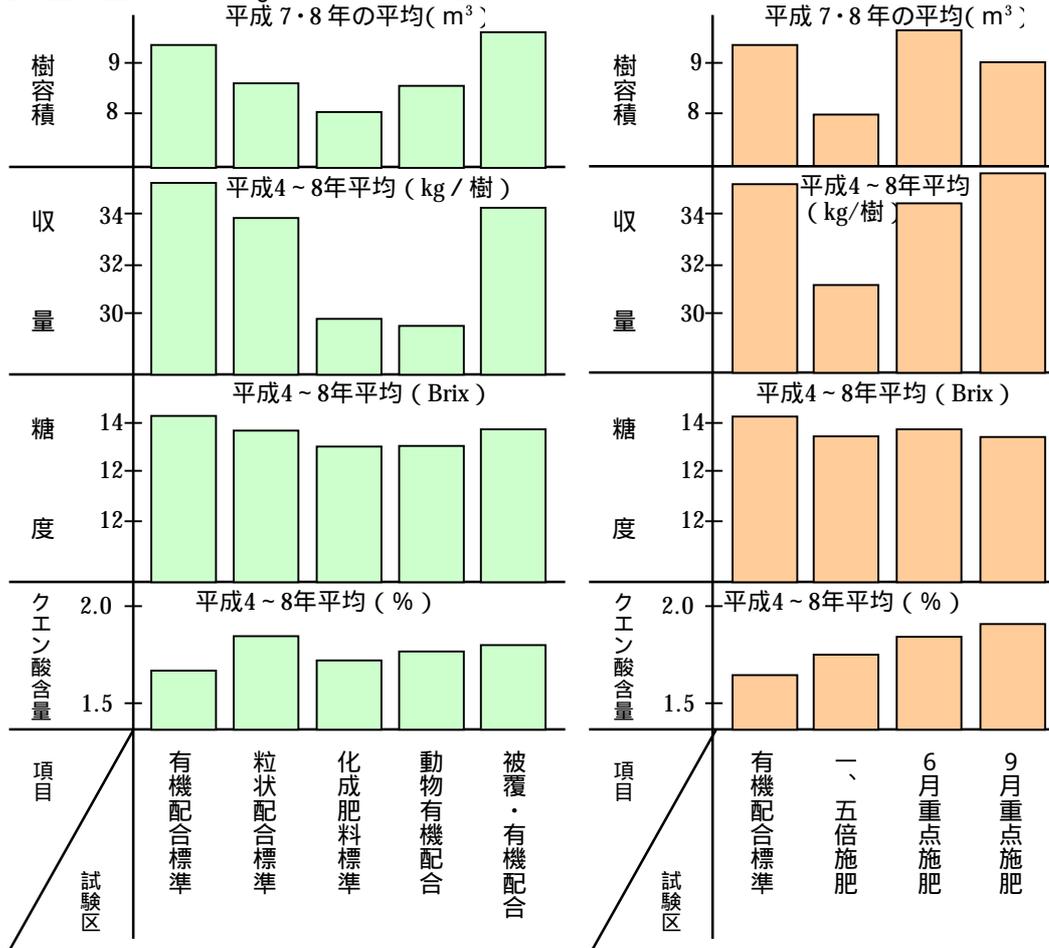


図1 肥料の種類別生育・収量及び果実品質

図2 施肥量・時期別生育・収量及び果実品質

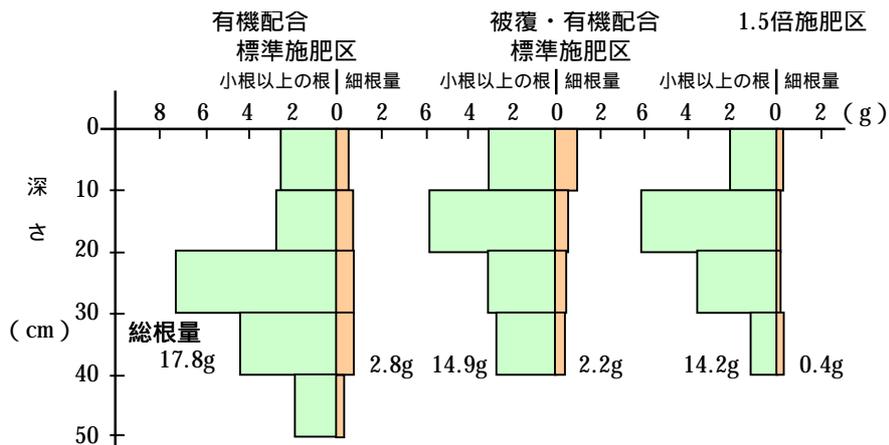


図3 デコボンの施肥量と根量

(主幹から 1m の位置で 30cm × 30cm の内に含まれる乾物根量)